

# ニューイングランドな夜 — 2人の米国専門医を迎えて—

平成27年6月  
沼尾 利郎



写真1

ニューイングランドの住宅

## 1 NEJM

ニューイングランド（写真1）は米国北東部の6州（コネティカット、メイン、マサチューセッツ、ニューハンプシャー、バーモント）のことであり、高度先進技術産業の一大中心地として米国全体の経済の動向に大きな影響を及ぼしています。また、この地域には米国最古の大学であるハーバード大学の他にマサチューセッツ工科大学（MIT）、タフツ大学など多くの高等教育・研究機関が集中しており、米国の学術・文化の中心地にもなっています。

医療関係者の中で「ニューイングランド」と言えば、多くの人が「ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン」（NEJM）を思い浮かべることでしょう。NEJMは世界でも権威のある医学雑誌の1つであり、「Lancet」「JAMA」などとともに世界5大医学雑誌に数えられています。NEJMは現在発行されている医学雑誌のうちでは世界でも最も長い歴史を誇り（1812年創刊）、また世界でも最も広く読まれ（発行部数約25万部）、そして世界でも最も影響力の強い医学雑誌（インパクトファクター50以上）といえます。ちなみにインパクトファクター（IF：文献引用影響率）とは、特定の学術雑誌に掲載された論文が特定の年または期間内にどれくらい頻繁に引用されたかを平均値で示す尺度のことであり、NEJMのIFは「Nature」や「Science」の値を大幅に上回っています。NEJMは医学界のトップジャーナルとして世界中の医療関係者から高い評価を受けており、掲載される医学研究論文は各種の産業・株式市場といった多方面にも強い影響力を与え続けているようです。



写真 2

ベス・イスラエル・ディーコネス・メディカルセンター

## 2 ポストンからの訪問者

ニューイングランドの代表的な都市といえばボストンですが、先日ボストンの有名病院から 2 人の米国専門医（ご夫妻）が当院を訪れ、若手スタッフを対象とした教育講演会（多職種）にて最新の医学情報をレクチャーしてくれました。夫であるヘンリー・コジール先生はハーバード大学教育病院の 1 つであるベス・イスラエル・ディーコネス・メディカルセンター (BIDMC)（写真 2）で救急医学と呼吸器疾患の専門医・指導医ですが、同時に自然免疫の研究者でもあります。今回は日本の学会のために来日され、国立病院機構茨城東病院斎藤院長のご厚意により当院に来て頂きました。一方、妻であるマーガレット・コジール先生はマサチューセッツ大学 (UMass)（写真 3）医学部教授で感染症専門医であり、C 型肝炎の世界的権威でもあります。お 2 人とも医療現場の第一線で活躍している臨床医であると同時に著名な研究者でもある訳ですが、英語のディスカッションに不慣れな我々に対して大変丁寧に対応してくれ、とても有意義な時間を過ごすことができました（写真 4）。

ヘンリー先生が勤務する BIDMC は常に米国のベスト・ホスピタルの 1 つにランクされており (*US News & World Report*)、米国国立衛生研究所 (NIH) からの研究費補助金総額が毎年国内トップスリーの常連というすごい病院です。一方、マーガレット先生が勤務されている UMass も“ユーマス”の名で広く知られた名門州立大学であり、世界大学ランキングで 100 位以内に入るほどのレベルの高さです（日本では東大・京大・阪大が 100 位以内）。そんなスーパードクターが当院のようなごく普通の病院に来てくれた訳ですが、若手医師たちは積極的に質問をして良い刺激にもなったようです。国際学会に行かなくても米国の専門医・研究者から最新の知見を直接学ぶことができ、本当に幸運でした。



写真 3

マサチューセッツ大学メディカルセンター

### 3 教育病院としての使命

当院は国立病院機構の使命として人材育成に力を入れており、医学生や薬学生、看護学生の臨床実習やリハビリテーション科や保育科の学生実習にも協力しています。例えば平成 26 年度は 105 名の医学部 5 年生が当院で臨床実習を受けており、看護学生についても県内 6 か所の看護学校・看護学部から年間 2446 名（延べ人数）の学生実習を受け入れました。またその反対に、当院の医師・看護師が医学部・看護学校に出向いて臨床講義も担当しています。

一方、医師の卒後研修については初期臨床研修病院（協力型）として、地域医療枠の 1 か月間を在宅外科・神経難病・結核・重症心身障害の 4 分野を研修するという特徴あるプログラムを用意しています（4 分野は自由選択制）。これらの分野はいずれも大学病院のような急性期病院では経験することが少ないものの地域医療の中で重要な領域であり、当院がプライマリケアの理解と実践に努めていることの証でもあります。



写真 4

コジール先生ご夫妻と当院スタッフ

#### 4 「教える」(teaching) から「学ぶ」(learning) へ

日本の医学教育は現在大きな変革期にあります(2023年問題)。これは、「米国での臨床研修資格を得るためには2023年以降は医学教育の国際認証を受ける必要がある」というものであり、このため全国の医学部ではカリキュラムの変更や実習期間の大幅延長など、医学教育体制がいま大きく変わろうとしています。「何を教えるか」というプロセス重視から「最終的にどのような医師を育成するのか」というアウトカム重視に変えること、見学・座学主体の受け身型臨床実習から診療参加型臨床実習への移行、医行為を行う医学生に強い使命感と責任感を与えるための学生医制度(student doctor)の導入など、変革の内容は様々です。

一方、医療現場では医療系の学生や研修医などへの実践教育を通じて、自分たちも学びあい学習しあうという組織風土の構築が求められています。別の言い方をすれば、

「Teaching is the best learning」 (教えることは最高の学習である)

ということになるでしょう。「教育を施す側が中心」の古いパラダイムから「患者と学習者を中心」とした新しいパラダイムへと、医学教育は確実に変化(進化)しつつあるようです。